クリミアはロシアにとって軍事、歴史の特別な場所

【ロシア・ウクライナ戦争（２４）】「停戦」が通奏低音となって響くが戦争を制御できる者はいない

公開日： 2023/04/11 (ワールド)

西谷　公明 (エコノミスト　元在ウクライナ日本大使館専門調査員)

リバディア宮殿（ヤルタ）＝GNU

４月７日、「イフタール」（イスラム教のラマダン中の日没後に摂る食事）の夜、ゼレンスキー大統領はクリミア・タタール戦士を前にクリミア奪還の誓いをあらたにした。

２０１４年2月２６日、ロシアは「マイダン革命」に乗じてクリミアを急襲し、併合した。多くのウクライナ国民にとり、進行中のウクライナ戦争は９年前のクリミア併合から始まっている。

ウクライナ独立時、クリミアでは住民の７割近くがロシア人で、ウクライナ人は４分の１を占めるに過ぎなかった。ロシア色の強い土地柄で、国民投票で独立に賛成したのは５４％と全土で最も低かった。そこで独立後、政府はロシア系住民の発言力を弱めるべく、クリミア・タタールの帰還を促す政策をとってきた。

この地のタタール（トルコ化されたクリム-ハン国の末裔たち）は、第二次大戦中にナチスに味方して赤軍と戦った廉（かど）で、戦後シベリアや中央アジアへ強制移住された人々だ。その数は１００万人近いとも言われる。トルコがこの戦争でウクライナを支持するのもそのためだろう。

余談だが、１９９２年夏、私ははじめてクリミアを訪れた。

ロシアもウクライナもクリミアが欲しいのはヤルタがあるからではないか。そう

思えるほどにヤルタは美しいところだった。ヤルタ会談がおこなわれたリヴァディア宮殿は、海を見下ろす高台の斜面にあった。黒海には波がなく、鏡のように光っていた。

半島の草原のあちこちで、故郷へ戻ったタタールの家族が煉瓦を積んで、住宅を建てる光景が見られた。

現在、クリミアの人口は約２００万。タタールは住民の１２-１５％まで増えている。彼らの多くは反ロシア感情を抱いてゲリラ戦も厭わない。

他方、プーチン大統領がクリミア編入を宣言した２０１４年3月１６日、ロシアでは数万のモスクワ市民が歓呼の涙を浮かべて赤の広場を埋めた。

クリミアこそ、すべてのロシア人の記憶に刻まれた歴史の要塞である。１８世紀後半、ロマノフ朝はクリム-ハン国を撃ち破ると、さらに南下を企てて、１９世紀半ばにはトルコとイギリス、フランスを相手に、文豪トルストイも従軍したクリミア戦争を戦った。

敗れはしたが、セヴァストポリ軍港は、ボスポラス海峡をのぞんで遠く地中海を睨むロシア安全保障の砦となった。そして今、西の飛び地カリーニングラードと南のシリアを弓状に結ぶ、対ＮＡＴＯ防衛線のセンターに位置するのがクリミアに他ならない。

ロシアが再びクリミアを手放すことはないだろう。

西側の戦車とロケット砲を補充したウクライナ軍による反転攻勢が近いとも伝えられる。

はたしてこの先、いったい誰がこの戦争を制御し得るのか。

マクロン大統領の訪中は、ヨーロッパ有力国フランスの危機感の顕われでもあるだろう。「停戦」を促す声が通奏低音となって響きはじめた。

プロフィール　最近の投稿

西谷　公明(エコノミスト　元在ウクライナ日本大使館専門調査員)

1953年生、長銀総研を経て1996年在ウクライナ日本大使館専門調査員。2004ー09年トヨタロシア社長。2018年N＆Rアソシエイツ設立し、代表。著書に『ユーラシア・ダイナミズム』『ロシアトヨタ戦記』など。岩波書店の月刊世界の臨時増刊「ウクライナ侵略戦争」で「続・誰にウクライナが救えるか」（2022年4月14日刊）を執筆。2023年1月に『ウクライナ　通貨誕生ー独立の命運をかけた闘い』（岩波現代文庫）を復刻。

Copyright © News Socra, Ltd. All rights reserved